

---

# オレとシアンの旅日記

みぞれ雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレとシアンの旅日記

### 【Nコード】

N0451I

### 【作者名】

みぞれ雪

### 【あらすじ】

“ 絆の冒険記 ” の番外編その1です。ホノオとシアンの旅の、本編で描かれなかった部分を執筆致します。

シリアスなのは最初だけ！？ 毎日がドタバタの、オレ（ホノオ）とシアンの愉快的旅日記です（笑）！

## 旅立ちのワケ（前書き）

どうも、ただいまテスト勉強の合間に、調子に乗ってこんなものを作ってしまったバカ作者、みぞれです！

セナ

「アホだ……。これで作者のテストはホノオ並」

いや、さすがに次の更新はテスト終わってからね（汗）

さてさて、この話は、第三者目線で書いている絆の冒険記の本編とは違い、ホノオの目線で書いてます。

本編の第8話くらいまで読んでいただければ、話が繋がりやすいかと……。と……。

そして、主人公がホノオ（笑）

ホノオ

「（笑）」ってなんスカクソ作者（怒）」

はっはっは（ー；）

……それでは、この駄文をお読みください（笑）

セナ

（けっこう適当なんだな、この小説は……）（笑）

## 旅立ちのワケ

……普通の中2は信じないのかも知れない。

『あなたの親友が、ポケモンだけが暮らす星 “ガイア” に行きました』

なんて言われても。

……しかも、夢の中で。

でも、単純バカなオレは、“瀬那” という単語を聞いて、すぐさま奴の話信じ込んだんだ。

あなたの親友、瀬那<sup>セナ</sup>さんが、使命を追ってガイアに行く途中、記憶喪失になってしまいました。

あなたにもガイアに行つて、彼の手助けをしていただきたいのですが

ある夏の日の夜、オレが見た夢。

その中に出てきた謎の光の渦 奴は“ポケモン”と名乗ったは、オレにそんなことを言ってきた。

あの日 中1の秋のある日、両親の離婚でお袋に引き取られ、オレは瀬那と、仲間と、過ごした街を去った。

瀬那の近くに居てやらなくちゃ……。

でも、一人っ子のオレが、お袋についていなくて良いのだろうか……。 だって、離婚は親父のせいだから……。

苦手な数学よりも、イタズラの言い訳を考えるよりも、遥かにオレの頭を悩ませた、この問題を解決してくれたのは、奴の一言。

『行つてこいよ！オイラは大丈夫だから……』

自分よりも、他人のことを考えるアイツ。

そんな瀬那の言葉に背中を押され、オレはあの街を そして、心に深い傷を負った親友の元を去ることにした。

“ポケモン”の話が本当だとすれば、“ガイア”って星に行けば、オレは、また瀬那に会える。

しかも、記憶を 心の傷を無くした瀬那に。

その旅路の途中にあるであろう、数々の事件や困難……。

そして、ゴールの先に待ち受けている、過酷な運命……。

そんなもの、当時のオレにはどうだって良かった。

瀬那に、会えるのなら。

……また、どうやら“ポケモン”は、人間を軽蔑しているようだった。

あの、人にものを頼んでいるとは思えない態度と口調に、短気なオレが苛立たないはずがない。

……見てろよ、“ポケモン”……。  
この、焰ホノオ様の活躍を！！

そんな思いも心に秘めつつ、オレは、長い冒険へ繋がる扉を蹴って開けた。

皆無に等しい情報と共に異世界に飛び込んだオレを待ち受けていたものは

真っ白な、旅路。  
。

## 旅立ちのワケ（後書き）

……いかがでしたか（笑）？

今回はわりとシリアスですが、次回からはホノオとシアンのハチャメチャ旅日記を書くつもりです（笑）

ホノオ

「だからその“（笑）”ってやめようぜ？」

セナ

「しっかし……。ホノオ目線で書くってことは、バカになりきらなきゃアカンですな（笑）」

ホノオ

「散々だな、お前ら（泣）」

本編とは違い、この小説は、ゆっくりマイペースに、更新する予定です（笑）

セナ

「クオリティーも、本編よりさらに落ちるとか（笑）」

ホノオ

「なんなんスか、もう……（泣）」

シアン

「次回から、みんなの人気者、シアンの登場だよ」

ホノオ

「調子に乗るな、ペンギン野郎（怒）」

それではー、長々と後書き失礼しましたー（笑）

ホノオ

「だーからーッ！！」（笑）”って （略WWW）」

シアン 旅路に塗られたトラブルの色(前書き)

超久々の更新です(笑)！

ホノオ

「また“ (笑) ”とか言ってるし…… (汗) 」

セナ

「 (笑) 」はお前のトレードマークだからな(笑) 」

ホノオ

「何それ? ……何それ(泣)? 」

さて、今回はいよいよシアンの登場なのですが、シアンとホノオの  
出会いは本編で散々書いたので、この話は、いきなり旅をはじめて  
から数日後な設定です！

ヴァイス

「へー。“オレとシアンの旅日記”……。こんな小説あったんだね  
」 (笑) 」

シアン

「最近全然更新されてなかったから、気が付かなかったでしょ(笑)  
? 」

ホノオ

「……………」

セナ

「……って、何がしてえんだテメーはああ（怒）！！！？  
“水鉄砲”！！！」

ホノオ

「うぎゃああ！！！」

それでは、どうぞ（笑）

## シアン 旅路に塗られたトラブルの色

オレがポケモンに ヒコザルになってから、数日後……。

その日の朝の出来事は、後に、憤慨した“アイツ”に教えられたんだ。

だって、オレはまだ寝ていたから。

いつものごとく、アイツはオレよりも早く目を覚ましたらしい。

それで、辺りに生えていた木から、木の実とかを採ってきてくれたとか……。

アイツが木の実採りから帰ってきたとき……、アイツに聞かれたオレの寝言の内容がまずかったみたいだ。

「シアン……。死ね……。死ね……。」

アイツ ポツチャマの“シアン”によると、オレはそんな寝言を言っていたそうな（ほんとかよ）……。

その直後、シアンは採ってきた木の実を地面に叩きつけ、オレの背中に“ドリルくちばし”を……。

こうして、オレはこの日、最悪な目覚めを経験した。

オレがポケモンになった次の日に、崖から落ちそうになっていたポツチャマのシアンを助けてやった。

それで、オレの事情を知ったシアンは、セナを探すために、ネイテイオ　ポケモンの居場所を探すこともできる、超能力者　に会いに行くことを提案し、オレの旅に同行してくれることにもなった。

最初はオレは、そのシアンの存在に感謝しっぱなしだった……けど。

こいつがまた、困ったトラブルメーカーなんだ……。

「いってえなあ！！何もそんな起こし方しなくても良いだろう！？」

寝言の内容を知らないオレは、シアンの起こし方を理不尽に感じ、怒鳴り付けた。

「ホノオのバカ！シアンに“死ぬ”なんて言ったなあ！？」

は……？

なんの話？

「ば、バカ！オレがいつ、そんなことを」

「さっき寝言で言ってたモン！」

シアンはオレの言葉を遮り、言い放つ。

寝言で……？

なるほど、だからこんなに怒ってるのか……。

「しょうがないだろ！？オレは別に、お前に死んでほしくはねえし  
」！

オレのその言葉を聞くと、シアンはコロッと嬉しそうな顔をした。

……気まぐれすぎて、疲れる……。

「ホント〜？」

「ああ、ホントホント」

オレはシアンの問いかけにめんどくさそうに反応した。

「わーい ホノオだーいすきだよ」

気持ち悪い……。

端から見れば、そう言ってオレに抱きつくこのポッチャマは、可愛らしくも見えるだろう。

それはきつと、コイツが女の子に見えるから。

でも、仮にもシアンは男だ。

シアンに出会った初日、オレもコイツの性別を間違えて、怒鳴られたものだ。

「放せよバカ」

冷たく言い放ってみたが、それがこの、空気の読めないクソポッチヤマには逆効果。

「あー ホノオ照れてる〜！」

……殺して良いかな？

このペンギン……。

「……………“火炎車”」

オレがついに、技“火炎車”を使うと、体から炎がでて、シアンを遠ざけた。

「熱いッ！熱いヨ！！」

シアンはじたばたしながら辺りを走り回る。

ざまあみろ。

「さあ、飯だ飯」

オレはシアンを無視してアイツが採ってきたリンゴを掴んだ。

「……そのリンゴ、実は毒が塗ってあるんだヨ？」

シアンはオレのリンゴを見ながらそう言った。

……マジかよ!?

「じゃあ、これはテメーにくれてやらあ。じゃ、このオレンの実は」

「それも毒入り」

オレが次に掴んだオレンの実も、どうやら毒入りのようだ。

「じゃ、この、毒を治す効果のある、モモンの実は……」

「それはネ、持ち帰る途中にラフレシアの痺れ粉がついちゃって……」

その後も、オレは問題アリの木の実を掴んでは、シアンによこした。

そうしているうちに、6つあった木の実が、全てシアンの手……。

「シアン……。なんでお前はまともな木の実を持ってこないんだよ……。  
しかも、毒入り食う気か!？」

うんという返事の代わりに、シアンはオレに毒入りだと言ったリンゴを頬張った。

「……毒なんて入ってないヨ？」

……は？

「え……。だって、さっき、毒入りって……」

シアンはオレの言葉を聞いてリンゴを吹き出しそうになり、慌てて飲み込むと、笑い転げた。

「アハハハ！嘘だヨホノオ！毒が入ってるわけないじゃん！」

……は？

「……じゃあ、このオレんも、モモンも、これもあれも……全部！？」

「ウン！あつたり前じゃん！」

……死ねクソペンギン……。

「オレの飯、よこせ……」

オレはシアンからオレんの実を奪ったが……

「えい！“ついはむ”！」

シアンはオレんの実を持ったオレの左手を、くちばしでつついた。

「いてえええ!!」

思わずオレがオレンから手を放すと、オレンはたちまちシアンの胃袋に……。

そして、オレが左手を押さえてわめいているうちに、残りの4つの木の実を、シアンが全部確保してしまった。

「これはシアンが探ってきたんだから、ゼーんぶシアンがもらっちゃうヨ」

……何を抜かすか、このペンギン……。

「オレの飯、よこせ……」

オレがシアンを睨み付け、歩みよると……

「キヤー!逃げろー」

短い足を気持ちが悪いくほど高速回転させ、シアンはオレから遠ざかる。

逃げ足だけは、速いんだ……。

「あーっ!待ちやがれ短足ペンギンー!!」

運動は得意なオレは、自慢の足でシアンを追いかけるが、飯は食ってないし、朝イチじゃ力が出ない……。

結局、シアンから木の実を取り上げるよりも、近くに生えている木に登って木の実を採る方が断然早いと気が付いたのだが……。

それに気が付いたのは、疲れはてて、木に登る気力もなくなった後のことだった……。

これは、ある日の朝の、嫌な思い出。

シアン 旅路に塗られたトラブルの色（後書き）

セナ

「ホノオバカすぎww」

だよー。

書いてて私もそう思いましたよー（笑）

しかもたいして展開面白くないし、グダグダだし……（汗）

ホノオ

「セナー。リンゴあげるー」

セナ

「おう 気が利くじゃねえか！

いただきまーす！！」

ホノオ

（ニヤリww）

セナ

「うつ……！？なんか、苦し……」

ホノオ

「残念セナ君、毒入りでしたあ、アハハハハ（笑）！！」

ヴァイス

（セナも、食べ物が絡むと判断力落ちるんだよなあ……（；——）

「3」

さて、次回の更新はいつになることやら……（笑）

今回のとじりは、この辺で

セナ

「誰か……モモンの実をくれ……」（泣）

やっぱり、そう見えちゃいます？（前書き）

て……てすと終わった……。

セナ

「お疲れ様ー。疲れ切ってんなー（汗）……」

物理と数学がヤバいです（汗）  
理系なのにな、私（^| ^;）

……と、まあそれは置いて……。

一ヶ月ぶりです、この小説の更新は（笑）！！

ホノオ

「……もうさ、いちいち“（笑）”に突っ込むの止めるわ……（泣）  
」

そして、ワタクシ、ある重大なミスをおかしていたので、訂正いたしました！

ヴァイス

「この小説のジャンルが“冒険”になってたから、“コメディ”に直したんだって（笑）！」

セナ

「そりゃあー致命的なミスですわー（笑）」

ホノオ&シアン

「……………どこが（怒）？」

……………今回のお話は、あまり上手く書けた自信はありません（汗）

なんだか文章書くのが久し振りなもので……………（汗）

とにかく、どっぴろぞー！！

やっぱり、そう見えちゃいます？

「明日は 晴れる、雨が降る、晴れ、雨、晴れ……」  
とある森でのことだった。

オレとシアンが“精霊の崖”を目指して旅をしている途中、シアンは森に生えていた小さな花を摘むと、不気味に何かを呟き、にやけながら花びらをブチブチと干切っている。

のかと思いきや、それはオレの早とちりみたいだ。

どうやらシアンは、“花占い”で、明日の天気を占っているらしい。

花占い。

あの、よく『好き、嫌い、好き……』とか言いながら恋を占うやつだが……。

それって普通、女がやるものじゃないのか？

しかも、“曇り”という選択肢は、シアンの中にないんだな……。

「……雨、晴れ、雨……！」

あっ、ホノオ！明日は雨だった！」

シアンが嬉しそうにオレに占いの結果を告げる。

……本気であんな占い信じるのか？このペンギンは……。

「あっそ。だから何？」

答えるのが面倒で、オレは適当に返事をした。

「だーかーらー。明日は雨が降るんだヨ！」

雨が降ったら炎タイプの技が弱くなっちゃうんだヨ？」

へー。

ってことは、雨が降ったらオレはバトルで不利なのかー。

まあ、“雨が降ったら”の話だけど……。

「あかさ。何を根拠に、雨が降るって言ってるワケ？お前は」

「さっきのシアンの花占いに決まってるじゃん！」

……こんなに自信たっぷりと言われると、もう馬鹿馬鹿しいと思わずにはいられない。

「へへえ。そんなに当たるんだ〜？その占い」

馬鹿にしたような口調でオレが言うと、予想通りの反応を……。

「何だヨ、シアンの占いを信じないノ！？」

「逆に、そんな馬鹿馬鹿しい占いで天気が決定してたまるかっつーの！絶対に明日は晴れるっ……！」

オレは、森の木々の葉の間から見える青空を、突き刺すように指を指して言った。

「ほら、今だってこんなに晴れてるじゃねえか！」

するとシアンは頬を膨らませて言う。

「 良いもんネ。もし晴れても、シアンが“雨乞い”して、雨降らせちゃうから。」

だから、占いは絶対に当たる運命なんだヨ！」

……コイツが人間として生まれていたら、詐欺師かインチキ占い師にでもなるんじゃないか、と、オレは思った。

「それじゃ占いの意味ねえじゃん！インチキー！卑怯者ー！」

「何サ、文句あるノ！？」

「文句しかねえよ！」

「何だとー！」

「やんのか！？」

……こうして喧嘩を始めたオレとシアンだが、まもなく騒動に巻き込まれることに。

「明日の朝、ぜってーお前より早く起きてやる！」

もしオレが太陽を見れたら、お前をブン殴るからな！！」

「ムカツ!!」

なにもそこまで、シアンの占いを否定しなくても良いじゃない!」

「信じる奴がいるか」

何かの気配を感じ取り、オレはとっさに言葉を切った。

そして、オレ達のすぐそばにあった木の葉が、激しく揺れる。

危ない!!

「うわ!」

オレは木の上からオレめがけて飛んでくる電撃を目でとらえると、素早くそれをかわす。

いきなり何なんだ!?

「な、何しやがる!?!出てこい!」

思いきり木を蹴ると、オレにいきなり攻撃を仕掛けてきた卑怯者が落ちてきた。

「いてっ!」

地面に顔をぶつけ、その黄色い頭がコンセントのような変な形をしたポケモンは、涙目になる。

情けねえ奴だ。

「どうしてホノオを攻撃したのサ、エレキッド君？」

シアンがそいつを問いつめると、そのポケモン “エレキッド”  
という種族 は、急に威勢良く、オレを指さして言う。

「オレの名前は、エレキー！！」

そのこのヒコザル！オレと勝負だ！おっ、お前が負けたら、そのこのポ  
ツチャマをよこせ！！」

なんか変に緊張してるな……。

それより、なぜシアンが必要なのか……？

「えええーっ！！なにその展開！？」

シアンはこの急展開に、もちろん驚いている。

オレにだって驚きの感情はあるが、それより、気になるんだ。

どうして、シアンを……？

もしかしてシアンには、なにか秘めたる素晴らしい特殊能力が  
！？

だとしたら、渡せねえな。

「このホノオ様に挑むってか？身の程知りな！  
シアンは渡せねえよ！」

オレがそう言うと、エレキッドのエレキはオレを睨みつけ、襲いか  
かってきた。

「うるさい！とにかく行くぞ！“雷パンチ”！！」

その手に電気を纏わせると、エレキはオレを殴りつけようとする。

しかし、そんな単純な攻撃にやられるわけもなく、難なくオレは攻撃をかわした。

「へっへーん！その程度か？」

「う、うるさい！じゃあ“電気ショック”！」

相変わらずどこか理不尽に、再び攻撃を仕掛けるエレキ。

……さすがにつまらねえな。

たいして攻撃も強くないし、簡単にかわせちまう。

そう思ったオレは、戦いながら、どうしてエレキがシアンを狙うのか探ることにした。

「おいエレキ。どうしてお前はシアンを狙うん？」

オレは、退屈そうに花占いをしているシアンをチラリと見ながら、まずは簡潔に、ストレートに聞いてみる。

すると、エレキはそれに、無意識のうちに顔で答えながら言った。

「お、お前には関係ないっ！！」

……エレキの顔が赤い。

もしかして……。  
もしかしなくても……。

つまらないほど容易に分かったその真相は、あまりにも面白かった。

オレは、この騒動を最高傑作に仕上げるシナリオを瞬時に頭の中で描く。

勉強はできないけど、イタズラや悪巧みならお手のものさ！

「何？もしかしてシアンのこと？」

肝心な部分は、表情で語るオレ。

エレキをニヤニヤと笑いながら見ていると、奴は顔をさらに赤くする。

「うっうっうるさい！！」

“電気ショック”！！」

エレキは、その先を言わせるものか、と言わんばかりに、ムキになつてオレに攻撃を仕掛けた。

作戦決行だ！！

「うわあああ！！」

オレは、軽々かわせる攻撃を、わざと受ける。

……今までエレキをナメてたけど、攻撃に当たると、意外とキツかった。

予想以上に強い電撃がオレの体を貫いたのには驚いた……。

本当はまだまだ戦えるけど、あえてオレは倒れ込む。事実、結構痛かったのだが、なかなかの名演技だ。

さて、これから見物だぞ。

倒れたフリをしているので顔を上げられないが、オレはシアンとエレキのやりとりを聞くために耳を澄ます。

これから交わされるであろうう会話を想像すると笑いがこみ上げるが、必死に我慢して。

「やった、勝った……!!」

エレキが、信じられないと言うようすで言う。

ぐふふふ……。

作戦通りだ!

「ホノオ、大丈夫!？」

シアンがオレの元へと駆け寄ってくる。

すると、エレキはそんなシアンに言った。

「やっと君を手に入れた……。さつき森で見かけてから、君の可愛らしさに一目惚れしたんだよ。君のように可愛らしいポッチャマは、初めて見たよ……」

「ぶっ……！！」

オレは思わず、そのセリフに吹きそうになる。

なんか、さつきまでとは全然違ったしゃべり方で……正直、気持ち悪いっいたらありやしない。

……このセリフが、男に向かって言っているセリフだと思うと、なおさらだ。

そう。

この、エレキという名のエレキッドは、男だが……シアンが男であるとも知らず、シアンに恋をした……。

傑作だ！！

さて、この後どうなったかは、おそらく誰もが予想できるだろう……。

オレは、顔を伏せていたから状況を見ることができなかつたけど……

シアンが、『シアンは男の子だヨー！』と、お決まりのフレーズを

叫んだことと、エレキという、1人のポケモンの恋が終わりを告げたことだけは、確かな事実のようだった。

……これは、多分いつまでも忘れることのない、オレとシアンの旅の中の、よき(?)思い出。

そしてちなみに、この次の日は、見事に暖かな日差しがオレ達に降り注ぎ　つまり、シアンのくだらない花占いは、見事に外れたのだった。

やっぱり、そう見えちゃいます？（後書き）

まあとにかく、伝えたかったことは……

ホノオ

「シアンは女に見えるってこと（笑）！」

セナ

「まさかホントに、男から恋愛対象に見られるとはな（笑）！」

ヴァイス

「オスのポケモンに“メロメロ”やってみたら効くかもよ（笑）？」

シアン

「……………この小説でいじめられるのって、ホノオだけじゃないんだネ  
……………（泣）」

いじめじゃない、いじってるだけです

## 天才気分（前書き）

久々の更新ですね……ごめんなさい（汗）

ホノオ

「全くだ（怒）」

さて、今回のお話についてですが……特に、小・中学生の読者様にお願いがございます。

セナ

「なんだあ、改まって?」

ぜひ、今回のお話は、あとがきに目を通してください（汗）！

ヴァイス

「なんでそんなに焦ってるのさ?」

いやあ、皆様に変な知識を植え付けてしまったら、わたしやどっ責任取ればいいんじゃない……と思いまして（汗）

シアン

「あー、そうだね〜（笑）」

シアンだけは、事情を知っている（笑）

では、久々になりましたが……どうぞ！

## 天才気分

ある日のこと。

オレとシアンが、ネイテイオに会いに行く旅の途中に、小さな山を歩いている時のことだった。

この山に生えてる木々はあんまり大きくなくて、よく日光が差し込んでくる。風の流れも良いし、キレイな透き通った川が、ゴツゴツした大きな岩を叩きながら、爽やかな音を立てて流れている。

オレは心を弾ませながら、いい気分で山を歩いていた。  
シアンに、あんな質問をされるまでは。

「ねえ、ホノオ？」

もう少しで山の頂上にたどり着く。そんな時に、シアンが話しかけてきた。

「ん？　なんだシアン？」

機嫌が良かったから、いつもよりもまともな返事を返した。

「今日の朝ネ、ホノオの寝言を聞いていたら、シアンの分からない言葉があったノ」

また寝言の話か。自分が知らないところで聞かれていたと思うと、

なんだか恥ずかしい。

だいたい、シアンは起きるのが早すぎるんだ。まさか、オレの寝言を聞くために早く起き　　ているワケはないよな。

「ふーん。で、その言葉って？」

「あのネ、“しめんそか”ってどういう意味ナノ？」

軽い気持ちで話してたオレの表情を、一瞬こわばらせるシアンの一言。

「四面……楚歌か」

四面楚歌。聞いたことはある。人間のところに、学校で確かに習った。

しかし、オレもなんでまたこんな寝言を？

少し考え込むオレの顔を覗きながら、シアンは目を輝かせ、ワクワクしながらオレの答えを待っている。

早く答えなくちゃ。

“四面”ってことは……。 “四”角い“面”。 “四角形”のことか。

“楚歌”は……。 “歌”って意味だよな。 “楚”の意味はよく分からないから無視しよう。

じゃあ、“四面楚歌”は“四角形の歌”？ ……いや、もうちょい捻ろう。

“四角形”ってのがおかしいんだ。歌う場所で、四角ときたら…

…そうか。“四面”は“教室”のことか！

ちよつと考えてみると、それっぽい答えにたどり着いた。  
自信満々に、シアンに説明する。

「よく聞けシアン。“四面楚歌”ってのは、“教室に響き渡る、生徒の歌声”って意味なんだよ！」

オレ様の的確な答えにシアンは納得し、ニコリと笑った。

「すごい！ さっすがホノオだネ」

「当たり前だろ！ なんとってホノオ様だかな」

なんかウキウキしてきた。

人間の時は、みんなにバカバカ言われてきたオレ。でも、このガ  
イアなら 学校のない、ポケモンだけの世界なら、オレも充分賢  
いんじゃないか？

よし、これはチャンスだ。シアンにオレ様の賢さを見せてやら  
ねば。

こう考えると、さっきまで嫌だったシアンの質問が、イヤじゃな  
くなった。

なんでも来い。オレが答えてやるぜ！

「ねえねえ、ホノオ」

またシアンが話しかけてくる。シアンに話しかけられてこんなに  
ワクワクしたことが、かつてあっただろうか？

なかったはず

だ。

「どうして木の葉っぱは緑色なの？」

これはさっきのよりもだいぶ簡単だな。

「決まってるだろ？ 緑は目に優しい色だからだよ！」

もし山の木の葉っぱが全部黒とか紫とか青じゃ、気持ち悪いからな。

「ホノオ、すごい！ なんでも知ってるネ」

生まれて初めてだ、こんな気分。自分が天才になったようないや、シアンに比べれば充分賢いのかもな。

「まあな まだ質問あるか？」

どんな質問にも答える自信が、今のオレにはあった。少々無理やりな気はしたが、シアンにもっといろいろ聞いてほしくて。

するとシアンが話し出す。

「じゃあ、どうして昼の空にはお星様がでないの？」

「動物にはな、“夜行性”って奴もいるんだ。オレらと違って夜に活発になる ポケモンでいえば、ホーホーみたいな？ その“夜行性”が星なんだよ。だから星は昼間は寝てる」

我ながら、実に詳しく、分かりやすい答えだ。

シアンは“夜行性”なんて言葉を知ってるはずないから、感心したに違いない。

「へ〜！ じゃあ」

シアンがこんなに質問してくるとは思わなかった。きっと、日頃ためてた疑問を、頼りになるオレに聞いているんだ。

ますます気分がよくなった。

「五十歩百歩”ってどういう意味ナノ？”

「明らかな実力の違い”を表す言葉だよ。“五十”と“百”じゃ、二倍の違いだろ？”

「……ぷっ」

……ぷっ？

ほんの一瞬、シアンが吹き出したような気がした。

「どしたん？」

何がおかしいんだろう？ 疑問に思っつて、シアンに聞いてみる。

「本当に、ホノオって何でも知ってるんだネ〜 シアンが今まで分からなかったこともみーんな答えてくれるから、嬉しくなっちゃったヨ！」

なあんだ、そんなことか。ちょっぴり安心。

「じゃあ、これも分かるよネ？」

ちょっと、難しそうな質問が来そうな言い方だ。

「どうしてお腹が空いたらお腹がなるノ？」

え？ どうしてだろう？

「えーと……」

これは分からない……。

でもまあ、シアンならテキストに答えても納得するだろう。

「それは……自分の空腹を無意識のうちに他人にアピールすることで、食べ物を恵んでもらうためさ」

「じゃあ、どうしてお日様は毎日おんなじ方向から登るノ？」

「えー？ えーとお……。それは、宇宙に、チリでできたレールがあって、太陽がその決まったルートを走るからさ」

うーん、我ながらバカみたいな答えだ。まあ、シアンは信じたように、コクコクと頷いている。  
ならいいや。

「本当に、ホノオは何でも答えてくれるネ」      じゃあ、この質問も答えてくれる？」

シアンの上目遣いが、今日は可愛らしく見えた。何だかんだで、

頼られるって良いことだな。

「ああ。なんだ、シアン？」

最高の笑顔で、シアンが口を開く。

「ホノオが言ってたことって、いつからウソだったノ？」

その言葉を言った途端、シアンはどす黒い笑みを浮かべた。

……は？

もしかして      もしかしくても      は、はめられた？

シアンは無言でニヤニヤ笑うが、表情で答えを催促してくる。  
引きつった笑みを浮かべながら、オレが逆に質問をする。

「逆に、いつからお前はオレをからかっていたんだ？」

## 天才気分（後書き）

セナ

「皆様、うちのアホノオが嘘ばかり申ししてごめんなさい（笑）。あとがきにて、本文中でのシアンの疑問について説明します」といつても、スペースがないから簡潔に……」

Q：「四面楚歌”って？

A：周囲がみな敵で、孤立していること。

Q：どうして木の葉っぱは緑色？

A：緑色は、葉っぱの中の葉緑体などの色。

Q：どうして昼の空には星がないのか？

A：昼も一応星は出ているが、太陽の光に負けて見えない。

Q：「五十歩百歩」とは？

A：少しの違いはあるが、本質的には同じことだということ。

Q：どうしてお腹が空いたらお腹がなるのか？

A：これは、胃の中で空気が動く音。

Q：太陽はなぜ同じ方向（東）からのぼるのか？

A：地球が同じ方向に回っているから。

Q：ホノオ言っていた答えは、いつから嘘か（笑）

A：今回の話が始まってから、ずっと（笑）

セナ

「なんかおおざっぱだな（汗）。あ、うちの作者は大馬鹿者だから、間違いがあったら指摘してくださいと嬉しいです（笑）」

豹変！？ “虹色の森”！（前書き）

皆様、メリークリスマスです！

キズナ

「メリークリスマス！」

ホノオ

「この小説、久しぶりすぎる……（泣）」

いや、ずっと更新したかったんだけど、うまく仕上がらなくて（汗）。

今回の話は、イブと今日に少しずつ書いてたらできあがってしまいましたw

セナ

「これが、作者……そしてホノオから皆様への、身を削ったプレゼントでえす」

ホノオ

「そっだよ……。身を削りすぎてオレもつかつお節だよ……（泣）」

ヴァイス

（か、かつお節……（汗）？）

さて、おひとつ警告がございます。

今回の話は、ホノオとシアンのイメージを粉々に壊すおそれがありますw

前向きで爽やかでカッコいいホノオと元気なプリティーシアンち

やんをお望みの方は、お気をつけくださいw

セナ

「この小説の読者様は、明らかにそんな虚像ホノオは望んでないだろうよ。なんだよ“爽やかでカッコいいホノオ”ってw 気持ち悪いと思ったらありゃしないw」

シアン

「シアン“ちゃん”って……（怒）」

ヤバイ、シアンが怒る（汗）。とりあえず、覚悟してからどどどぞ  
!

豹変！？ “虹色の森”！

「うわぁ……！」

長い草をかき分けて森に足を踏み入れたオレとシアン。目の前に広がる光景に、珍しく仲良く歓声を上げた。

「わーいつ！ “虹色の森”に到着！」

と、シアンがはしゃぎ始めた。珍しく、シアンのガキみたいなりアクションを大げさに感じられないオレがいた。だって

この森に生えている木々には、赤や青、黄色に紫……と、色とりどりの小さな木の実がぎっしり、いや、どっさり？ いい表現

が思い浮かばないが、とにかくたくさんのお木の実がなっていた。“オレンの実”でもないし、“モモンの実”でもない。見たことのない、きれいな丸い実。

都会のイルミネーションや夜空の星は綺麗だけど、太陽の下で輝く木の実も同じくらい綺麗だと思った。

「ホノオをこの森に連れてきたかったんだ　キレイでしょ？」

と、シアン。なんとも可愛らしいセリフ（これは皮肉である）。

一応弁解しておく、コイツは女の子じゃなくて男の子らしい。

「ああ。お前にしちゃ気が利くじゃないの」

「もう、ホノオは素直じゃないなあ」

オレの返事に、シアンは不機嫌そう。……いや、逆に素直だよ、

オレは。思ったことを素直に隠さず言える正直者だよ。

「まあいいや。ねえホノオ。この木の実食べてみようヨ！」

「毒はないだろうな？」

シアンが“ある”と言えば、確実に毒はないということ、オレは学んでいた。あれ？ でも今、シアンは自分から食べることを提案したわけで……。あれ？ じゃあ毒なし？ あれ？ あれ？

「毒はないヨ。当たり前じゃない！ 死んじゃうヨ」

そくだよな、死んじゃうよな。

森の木の高さは様々だ。シアンでも実を取ることができる木もあれば、大型ポケモンにちょうどよい木もある。シアンは背伸びをして、木の低い枝から緑の実を2つもぎ取った。1つをオレに投げたよこす。

「さあ、食べようっ！」

無駄に元気なシアンちゃん。彼女……。いや、彼の言葉とともに、オレは一口で食べられるその実を口に放り込んだ。甘いし、まずくない。シアンにしては珍しく饜なしか？

ん？ ほんの一瞬、めまいが……。

僕はふとシアンさんを見てみました。あれ？ シアンさんは木の実を食べないんでしょうか？

「シアンさん？」

と名前を呼んでみると……。

「ぷっ！ アハハハハ！ ホノオ、気持ち悪い！」

僕を指差して、シアンさんは笑い転げます。

「えっ、僕、なにかしましたか？」

「ホノオに敬語がこんなに似合わないとはネ〜！」

「僕は元からこんな性格ですが？」

シアンさんが笑っている意味を必死に考えていると、突然、少しめまいがしました。あれ？ さつきもこんなめまいが……。

「だああ、違う！ オレはあんな丁寧な性格じゃねえ！」

と叫んで、オレはハツとした。なんでオレは、あんな言動を？

「はーっ、面白かった」

と、ご満悦のシアン。まさかコイツのせいかな？

「説明してあげるヨ。この“虹色の森”の木の実を食べるとネ、一時的に性格が変わるんだヨ」

「はー、なるほど。だからさつき、オレは急に穏やかな気持ちになっ  
つて……」

シアンごときに敬語を……。ああ、オレの黒歴史がまた1ページ増えてしまった。

「そうそう。さっきの“緑の実”は、丁寧に穏やかな性格になる木の実なんだヨ」

そうとわかれば、仕返しあるのみ！ オレは近くに生えていた木から“青色の実”をもぎ取ってシアンを睨みつける。が、シアンの手にも“黄色の実”が！

「むむ……。ホノオにしては頭を使ったネ。仕返ししようとするなんて」

「オレはどんだけバカなんだよ……」

「宇宙で一番じゃない？」

「なんだとーっ！」

と、叫んだのがいけなかった。シアンがオレの口めがけて“黄色の実”を投げ込んだ！

あっ、食べちゃった。そしてまた、めまいが……。

「まっ、いっかあ。死ぬ訳じゃないしっ」

うんうん。命があれば、人生オールオツケー！

「ぶっ……」

シアンが笑いをこらえている。面白い顔だなあ。

「ねえホノオ。怒ってないノ？」

「ないよ？ 怒っても寿命が縮むだけさ。人生前向きに生きた者勝ち！ 嫌なことは忘れようぜ！」

「じゃあ、これでも怒らない？」

と言った直後、シアンはオレの頭を思い切り殴った。

「いて！ まあいいや。これで頭がよくなったりするかもね。そしてシアン。君は恩人だよ！」

ありがとうシアン！ オレは嬉しさのあまりシアンの両手を掴んだ。

すると、まためまいが……。

「……って！ いてーよバカ！」

ちくしょう、またやられてたみたいだ。オレはシアンを突き放し、シアンの口にさっきの“青色の実”を突っ込んだ。

「キャ………！」

叫んで抵抗しようとしたシアンだが、力でオレに勝てるわけもない。結局、木の実を飲み込んだ。

その直後。シアンの目が潤み始めた。

「もういいんだ………」

と言って、シアンは泣き出す。

「どうせホノオは、シアンのこと嫌いなんだ……」

いつもならオレは、「当たり前だ、バーカ」などと言い返しているだろう。しかし……なんだ、このしんみりした雰囲気は……。シアンはマジで泣いている。

「え？ いやあ、その……」

言葉に詰まるオレを、シアンはさらに困惑させる。

「いいよ、気を使わなくて……。シアン分かったんだよ。シアンは君の重荷さ。……ああ、こんなダメな奴が生まれてきてごめんさ。生まれ変わったら石ころになって、大人しくだれかの漬け物づくりに貢献します……」

「そんな来世望むなーっ！」

とオレが突っ込むと、急にシアンは泣き止む。やれやれ。効果が切れたようだ。

「キヤアアッ！ なにこれ！？ シアンは漬け物石になんかなりたくないヨーツ！」

大絶叫。いつものシアンに戻ったようだ。

「だけど自分で言ってたぜ？ やーい、漬け物石！」

「うるさーいつ！ 漬け物石って言った方が漬け物石なんだヨ！」

「そんなことわざ知りませーん！」

シアンをからかうのは本当に楽しい。久々に優位に立ったオレは、即座に作詞作曲した変な歌を大声で歌ってやった。

「では、ここで一曲。タイトルは“シアン”の夢”。生まれ変わるたら石ころになりた〜い。そしてあーなーたーのー漬け物ー石に〜」

なかなかいい曲だと思う。だが、調子に乗りすぎたのがいけないかった。

「漬け物〜は美味しいかい？ ず〜っとシアンをそばに〜置いてネ〜。そしてーシアンを〜 むぐっ！」

シアンに、1つ、2つ、3つの木の实を口に押し込まれた。これって何色？

などと考えているうちに、まためまいが……。

「グヒョヒョヒョ！ 木の实美味しいんだぜ！ グフフー！」

オホウ、シアンがこっち見てるうー！ しかも笑ってるうー！

「へーい、シアンちゃん。ミーが食べたこの美味しい木の实は何色だーい!?」

「ぷつ……。3つとも“赤色の実”だよ。アハハハ！ やっぱりホノオが壊れたー！」

「イツヒヒー！ 赤色最高なんですけどー！ ウヒヨー！」

なんかテンション上がってきたーッ！ すっごく踊りたい気分

「ヘイヘーイ注目！ これからボクチャン踊っちゃいまーす げ  
へへへ！」

「さ、さすがにテンションが高くなる“赤色の実”をうつはきつかつたカナ？ ましてや元々ハイテンションなホノオ……」

シアンがなんか顔をしかめて呟いてる！ よーし、ボクチンが元気を出させてやるんだぜ！

「シアンちゃん 君もオレツチと一緒に踊ろうぜ〜？ ウヒヒ  
ヒ！」

「キヤー、やっぱり怖いヨー！」

あつ、シアンが逃げ始めたぞお！ なによ、鬼ごっこがしたかったのね！

「待て待てえ〜、シアン！ ガツハツハツハツハ！」

「キヤー、来ないでヨーッ！」

せつかく楽しい楽しい鬼ごっこが始まったのに、チクショー、めまいのバカヤロー！！

悪夢だ。

“赤色の実”の効果が切れて我を取り戻すと、オレの全身から力が抜けた。

「ホノオ？」

オレの変化に、シアンも気がついたらしい。マズいぞ……。

“グヒョヒョヒョ”？ “イツヒヒー”！？ 他にも数々のアブナイ笑いを連発してたぞ、オレは。……これは人生最悪の黒歴史だ……。ヤバい！ シアンにバカにされる！

「元に戻ったんだネ！ ホノオー！」

シアンはすごく嬉しそうな顔をしてこちらに駆けてくる。そうか。そんなにオレをバカにするのが楽しいのか。なんかムカつく……。赤、青、黄色にオレンジ……。即座に近くの木々からありったけの木の実をもぎ取る。そして、オレに駆け寄り抱きつこうとしたシアンの口に、全てを押し込んだ。

この行動を、オレはひどく後悔することになった。

一時間後。オレ達はとっくに森から抜けていた。

「……いい、天気だな、シアン」

きこちなく話しかけてみるが、返事は……

「……………」

無言。

「ほらシアン。お花だぞ、お花」

「……………」

普段のシアンなら飛びつくきれいな花も、完全無視。

「なんだよ、怒ってるのか!? 自業自得だろバカシアン!」

「……………」

「ごめんなさい、シアン様。オレが悪かったです……………」

「……………」

「あーもう! ヤケクソだーっ! シアンの夢は潰けー物ー  
石ー つ・け・も・の! 軽ー石でもーいいヨー か・る・い・  
しー!」

「……………」

何を言ってもシアンは無言。そのかわりに、近くにいた親子連れ

子はピチューで、親はピカチュウ に指を刺された。

「ママー、あのお兄ちゃんへんなおうたをうたってるよー」

子供がいうと、

「しっ! 見てはいけません」

と、母親。

2人はひそひそと話しながら遠ざかってゆく始末……。

説明するまでもないと思うが、シアンが無口なのは、当然オレが食べさせた木の実達のせい。しかもたくさん食べさせたから、効果がなかなか切れない。

「は……ははは……。もう、イヤ」

「……………」

なんだか泣けてくる。普通のアホシアンが、これほどまでに恋しくなるなんて。

結局、シアンの性格が元に戻ったのは日没直後。

そのころにはオレの気力は尽き果て、今度はこちらが無口になったの言うまでもない。

豹変！？ “虹色の森”！（後書き）

いかがでしたか（笑）？

ホノオ&シアン

「とつても、恥ずかしかったです……」（泣）

ヴァイス

「キミらの感想はいらんじやないかな（汗）？」

セナ

「意外と言うねえ、ヴァイス（汗）」

この“虹色の森”には、テンション高くなる赤色、前向きになる黄色、後ろ向きになる青色、真面目で丁寧になる緑色の他にも……

セナ

「ちよつ、やめる作者！」

ヴァイス

「わあー、食べたくないよー！」

ホノオ

「なるほど。セナとヴァイスが実験台ね（笑）」

シアン

「あ、たべちゃった」

セナ

「オレンジ色？ 短気になる木の実に決まってんだろこのバカが！」

ヴァイス

「黄緑色は、なんだかとってもものんびりやさんになる木の実はなんだ」

そして紫色は……

ホノオ

「あ、作者が食べちゃった」

とても勉強熱心になる木の実はです（ ）。

シアン

「ホノオが食べれば良かったのにネ」

という訳で、私は英語の勉強をしたいのでこれにて失礼します。しばらく更新できませんが、これからも“絆の冒険記”シリーズをよろしく願います。

それでは皆様、よいお年を！

セナ

「おんどりゃー、お年玉よこせエ！ 金、金、金エ！」

ヴァイス

「だめだよお、セナ。そんなこと言っちゃあ（汗）」

ホノオ

「上2人がキャラ崩壊中につき、オレ達がまともなごあいさつを申し上げます 2010年も一年間ありがとうございました！」

シアン

「2011年もよろしくネ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0451i/>

---

オレとシアンの旅日記

2011年10月9日19時47分発行